

子どもの健康と病気の予防⑱

- 溶連菌感染症 -

小宅医院 小宅民子

溶連菌感染症とはA群β溶血連鎖球菌という細菌によって起こる感染症です。流行時期はおもに11月から4月といわれています。大分県では昨年の12月頃より大流行しました。

潜伏期間は約2～5日で、飛沫感染(せきやくしゃみなど)や接触感染(細菌のついた手や鼻をさわるなど)でひろがります。子どもにも多い感染症ですが、大人にもうつり、発症することがあります。

主な症状は、発熱・のどの痛み・発疹・苺舌(舌の表面に赤いブツブツができる)・腹痛・吐き気などです。

溶連菌は迅速キットによる診断が可能で、のどを綿棒でこすって検査を行います。5～10分程度で結果が判定できます。

溶連菌感染症と診断された場合、抗生剤を飲んで治療します。抗生剤を服用すれば、2～3日で症状が良くなります。しかし、良くなったから

といって薬の服用をやめず、7～10日間飲み続けます。途中で薬をやめると、溶連菌が再び増え始めて再発したり、急性腎炎、リウマチ熱、血管性紫斑病などの合併症を引き起こすことがあります。必ず処方された薬は飲みきりましょう。

溶連菌感染症は、周囲の人に感染が拡大するリスクが高い感染症です。したがって、溶連菌感染症と診断を受けたら登園・登校は控える必要があります。

登園・登校は、抗菌薬内服後24時間以上経過し、全身状態が良ければ可能です。

少なくとも受診した当日と翌日は出席停止となります。

溶連菌には予防接種がないため、手洗い・うがいなどの基本的な対策で感染を予防することが大切です。



溶連菌感染症の5つのポイント!

- ① 潜伏期間は2～5日、飛沫感染や接触感染でひろがる
- ② 主な症状は、発熱・のどの痛み・発疹・苺舌など
- ③ 治療は、抗生剤の服用。7～10日間服用する
- ④ 合併症は、急性腎炎、リウマチ熱、血管性紫斑病など
- ⑤ 登園・登校は、抗菌剤内服後24時間経過し、全身状態が良ければ可能

